

だ。

ひといきついたら、イノシシめ、ブオーとうなった。負けてはたまるかど、武兵衛さも身がまえる。

またまた、大かくとうよ。そしてくたびれるとひとやすみして水、それからまた大かくとう……。

こんなことを何べんもしておるうちに、とうとう、武兵衛さはバツタリ、イノシシもドテーン。通りかかった村のしゅうがこれを見つけて村へ飛んで帰った。村中の男がてんでに鉄砲やら、何やらかっいでかけつけておどろいた。

なんと、さすがの大イノシシの鼻も武兵衛のナタで、すりきれた竹ぼうきみたいになつた。

それからは、村で何かの集まりがあると、きまって武兵衛さのじまん話がきかれるようになった。

宮坂 久仁夫

金蔵さんのにぎり飯



金蔵さんのにぎり飯

多治見の虎溪山を山越えした奥の谷あいには、高田、小名田という二つの部落がある。

高田の急な東斜面には、赤い練瓦で積み上げた幾本もの煙突が立ち、「窯所」として知られてきた姿を今に伝えている。

金蔵さんは、この土地の百姓のせがれとして生まれて六十余年、二、三反の稲作と、少々の野菜畑の耕作に精出している。

それでも、すでに働き盛りを過ぎていく金蔵さんにとっては、それほど楽ではなかった。その上、高田という地名からも知れるように、油揚げを斜めに積み上げたようなこの土地の畑作では骨折りだけが目立っていた。

だが、金蔵さんは、ぐち一つ言うわけでもなく、朝から晩まで、野に出て背のびする暇も惜しむように働いてきた。

ところが、ある年の暮れ、金蔵さんは畑で大根の土を落としながら、こんなことをつぶやいていた。

「いつまでもこれだけばかりの田畑の手入れに明け暮れておっては、第一ご先祖に申しわけがな

い。さいわい、この山の上にはまだ広い土地があるはずじゃ。一つあれを起こして（開墾して）新しい土地を広げよう。」

こんなことを思いついた金蔵さんは、短かい冬の日の過ぎるのを気にしながら、早々と仕事の段取りにかかった。

身のまわりのしたくは息子の嫁にまかせ、自分では、のこぎりの目立てをしたり、唐鍬の柄をすげかえたりして山仕事の七つ道具をとりそろえた。

それから二、三日して、すべての道具をからだじゅうに着けた金蔵さんは、サクツ、サクツと深い霜柱を踏みながら谷川沿いの小道を登っていった。

いよいよ金蔵さんの仕事始めの朝がきた。下刈りをして木を切り倒す。その枝をつだんでたばねるなど。

ただひとりだけの金蔵さんの力によって仕事は片端から進んで、一日、一日新しい土の香りのする畑になっていった。

ある日のこと、金蔵さんはお昼になったので、いつものように「松ご」や枯れ枝をかき集めたり、やかに水を汲んで昼飯のしたくをした。

山での金蔵さんの弁当は、たいていにぎり飯にきまっていた。

やっとしたくを終えた金蔵さんは、熱えはじめたたき火にやかんをかけ、その際に腰をおろした。

それから竹皮の包みを開いてその中の一つに手をつけようとした。

その時、

「ガサツ、ガサツ」

金藏さんの後ろの方で何かが重く枯れ笹でもおさえるように音がした。

「……………、また、山うさぎでも来とるな。」

金藏さんがなにげなくそちらをふり向くと、その五、六間（約十メートル）目先の木陰に一匹の狼が無気味に両眼を光らせてすごんでいる。

「ありや……………、狼じゃ……………」

とたん、にぎり飯をつかもうとした手がむしようにふるえだした。

そのうちふるえは全身に激しくきて、頭の中はからっぽになったが、それでも金藏さんは、歯がみするようにしてこらえ、どうしてこの場をのがれたらよいか、いっしょうけんめいに思案した。

その時、ふと以前に人から聞いていることを思い出した。

「そうじゃ、こんな時、むろん相手に立ち向かったらとんでもない目に会わされる。そうかといつて、やたらに尻ごみしていたらこれまた見すかされる……………」

そこで金藏さんは、おののく気持ちを命きりにおさえ、おちつきをよそおった。そして、前にすごんでいる相手に、持ち前のやさしい目差とともに声をかけた。

「おうい、こつちい、来んか……………」

「ほれ、にぎり飯、食えつ……………」

とぎれとぎれの金藏さんのことばが、荒い息とともに吐き出された。

狼は、さつきから金藏さんの骨まで見すかすように、じつとにらみつけていたが、この呼びかけで、はじめて二つ三つ、小さなまばたきをしてみせた。

「フウツ……………、これで命だけは……………」

そう思った金藏さんは、間を与えずことばを投げかけた。

「早よう来い、早よう、ほれつ……………」

こんどは、つかんだにぎり飯をうまそうに一口ほおばりながら、その手を狼に差し向けた。すると、狼は幾分目の力をゆるめ、大きな両方の耳をびくびくと前に伏せるようにした。

金藏さんは、もう、この意外な相手の動きを細かに見取ることができた。

「ふうん、狼のやつ、どうもこのにぎり飯に気を引かれているな。それにしても、こう火がたいであつちや、来ようにも来れんところじゃ、よしよし。」

自分合点にそう思った金藏さんは、そのことばとは裏腹に足をたき火につっこんで火の勢いをつけた後、ひぎの上の包みの中から鱈をまぶした別のにぎり飯を取り出した。そしてひよいと狼の足元に投げてやった。

狼は、手前に落ちたにぎり飯をじつと見すえた後は、二足三足、のめるようにして前に出てきた。

金藏さは、その狼のようすを、じつと上目づかいに見とけようとした。

金藏さの倍ほどもあろうかと思われる背丈、身細ではあるがすこみを見せつける骨組み、金藏さはとたんに首がちちんでまた二度目のふるえがきた。

狼は、小さくなった金藏さのからだを首を伸ばしてぎよつと一目にした後、大きな口を割ってにぎり飯を食わえ、そのまま後ずさりして林の中に消えていった。

金藏さは、狼の去った後もしばらく伏せるようにしていたが、やがて頭を上げてその後を確かめた。

「行ったあ……………」

とたんに急に空き腹を覚えて二つ目のにぎり飯に食らいついた。

そんなことのあったあくる日のこと、金藏さは、寒い雪の日であったが、きのうのことも忘れただかのようにまた山に登ってきた。

お昼近くになったので、いつものようにお茶をわかつて弁当を食べようとしていた。すると、また狼が出てきた。まったく同じ場所に、同じかつこうで。

「また来たあ……………」

金藏さは、身の毛がよだった。そこで手早にまたにぎり飯を引きよせて身構えた。

狼は、金藏さをじつとにらんでいたが、きのうほどのすこみはなかった。金藏さの次の出方をうかがい、きのうと同じような結果を待っているように見えた。

とはいっても、金藏さの方では、それ以上に心を許すわけにいかず、まったくきのうと同じように、にぎり飯を取り出してひよいと狼に投げてやった。

「また来たか。はれっ……………」

すると狼は、注文しておいた品物でも受け取るように、気安くがっぷり食わえてまた山に消えた。

それでも行きしなに、金藏さをぎよつとにらみつけておいていった。

三日目から金藏さは、嫁さんに頼んで特別大きなにぎり飯をこしらえて山に持ってきた。

狼は、次の日も次の日も、お昼になると金藏さの所にやってきては同じように、にぎり飯をもらって帰っていった。

ところが、そんなことが十日もくりかえされていた後、狼はさっぱり顔を見せないようになった。

金藏さは気になった。それからはお昼になると大きなにぎり飯をかかえては山の縁を回って狼を待ったが、二度と出てくる気配はなかった。

年は暮れて、金藏さは雪の降る正月を家で過ごしたが、やはり狼のことが気にかかり、三が日

の過ぎるのを待つて、そそくさと山に登ってきた。

山には正月のうちに降った雪が、開墾した土の上に積もってまぶしかった。

金藏さんがその近くまでやってくると、雪の上に点々と何かの足跡が見えてきた。とっさに胸をおどらせて駆けよって見たが、それは正月のうちに山うさぎが出てきて遊んだ跡のようだった。

そのうち山の雪も消えて、田んぼや畑に青々と麦の畝が見えるようになった。それにつれて金藏さんの仕事ぶりも気ぜわしくなっていた。

そんな日の昼さがりのこと。

金藏さんが山で仕事に精出していると、後ろから仕事着を強く引っぱる者がいる。驚いてふり向くと、それは以前のあの狼にまちがいなかった。

とっさのできごとに金藏さんは、唐剣をささえにしてやつと立っていた。そして、怖さと恐しさの気持ちに大きく揺らされていた。

狼は、荒くはずんだ息とともに、むしろように金藏さんを山に向けて引っぱった。狼の強い力にしようことなく動かされていった。

こうして金藏さんは山の奥深くに連れられてきた。

そこには、いつかの金藏さんの大きなにぎり飯のような顔の二匹の子狼が待っていた。親狼と金藏さんの姿を見つけると、いずれも待ちこがれていたように小首をかしげてしきりにしっぽをふつ

ていた。

後ろには、大きく、古びた洞穴があった。親狼はまた先にたつて金藏さんを引っぱり、その洞穴の奥深くにいった。

それから親子三匹の狼は、洞穴の入口にまるで狒犬のようにかめしくつくばった。

その時、山に急に突風が巻き起こった。そして木々が激しく揺れだした。その瞬間、山の手から数知れない狼の大群が地響き立ててなだれこんできた。

見れば、いずれも鋭く目をさかず、赤く裂けた口から無気味なきばをむき出して駆けこんでくる。

金藏さんはひとり、洞穴の中でしゃがみこみ、両手を合わせて念仏をとんでいた。

間もなく、このおそろしい山の嵐は通り過ぎた。そして山の静けさだけはもどったが、山は激しく荒らされていた。草木は蹴散らされ、なぎ倒されて、大きな古木だけが見るも哀れに傷ついて立っていた。

三匹の親子の狼は、その荒れ果てた山のようにすを見渡していたが、そのうち親狼は空を仰いで大きく背伸びした。

「ウオ……………」

そのうなり声は、あたりの山々に響き渡っていった。

牛 岩



それから親狼は後ろに向き直って洞穴の中にいる金蔵さを外に連れだした。そしてゆっくり金蔵さを開墾場まで送ってきた。その時金蔵さは、はじめて親狼の後足が傷ついて不自由だったことに気がつき、深くうなづいていた。

山にはもう、夕日が赤かった。

これにこたえるように山からも、狼の長く尾を引く一声があった。

横井 登

